

地域自然史と保全研究大会2025

関西自然保護機構（KONC）2025年大会 プログラム・講演要旨集

- ◆日時：2025年3月2日（日） 10：00～17：00
- ◆会場：大阪市立自然史博物館 本館 講堂・ナウマンホール
- ◆参加費：無料（ただし博物館入館料が必要）
- ◆主催：関西自然保護機構・大阪市立自然史博物館

- ◆プログラム◆ ポスター掲示（10：00～17：00）
 - 10：00～10：30 関西自然保護機構2025年度総会
 - 10：30～11：45 口頭発表（2024年度研究助成事業研究報告会）
 - 11：50～12：30 2024年度四手井賞授賞式典・授賞記念講演
（昼休み）
 - 13：30～14：30 ポスター発表 コアタイム
 - 14：30～17：00 シンポジウム「関西の草原：現状と今後の課題」

■2024年度四手井賞 授賞式典・授賞記念講演（11：50～12：30）■

●Z01 「伊吹山における植生保全の取組の現状」

高橋滝治郎（ユウスゲと貴重植物を守り育てる会）、高橋順之（米原市伊吹山文化資料館）

2022年8月の関西自然保護機構の伊吹山フィールドシンポジウム以降、かつて豊かな草原植生が広がっていた南斜面で大規模な土砂災害が発生した。2023年と2024年の短時間の大雨による土砂崩れで登山道は通行禁止に、標高1,000mを越えるエリアの土砂流出が山麓（標高200m）の人家に襲来する想定を超えた災害が発生した。このため斜面の植生再生事業が喫緊の課題となり取り組みが始まった。一方で獣害防止柵による植生保全も試行錯誤を繰り返して一定の成果が現れてきた。

■ 口頭発表（2024年度研究助成事業研究報告会）（10：30～11：45） ■

- 001 「森林生態系の物質循環に対する樹幹着生性地衣類の寄与：森林構造の変化に伴う地衣類の存在量およびリターフォールの変化」
杉本 廉（神戸大学大学院農学研究科）
- 002 「トノサマガエルの減少に対する捕食圧の影響の解明」
角 うらん（神戸大学国際人間科学部環境共生学科）
- 003 「ゴルフ場池は生物の生育生息場所として機能するか」
廣田瑞希（近畿大学大学院）
- 004 「関西地方のカブトムシ販売個体における系統解析に基づいた流通経路の解明と遺伝的攪乱の実態検証」
濱野 友（兵庫県立大学大学院環境人間学研究科）
- 005 「環境DNAメタバーコーディングとQGISを活用した水生コウチュウ目の多様性解析」
う せいせい<Wu Qianqian>（神戸大学人間発達環境学研究科）

■ シンポジウム（14：30～17：00） ■

■ 「関西の草原：現状と今後の課題」

- S01 「日本の草原研究と実践の現状」
湯本貴和（きょうと生物多様性センター）
- S02 「遺伝情報からひもとく草原性絶滅危惧昆虫の歴史と保全」
中濱直之（兵庫県立大学・兵庫県立人と自然の博物館）
- S03 「奈良県曽爾高原の堆積物記録から読み解く火入れの歴史と環境変遷」
井上 淳（大阪公立大学大学院理学研究科）
- S04 「近畿地方における海岸植物群落の多様性と現状」
黒田有寿茂（兵庫県立大学・兵庫県立人と自然の博物館）
- S05 「里草地の送粉ネットワークのジェネラリストによる送粉機能の低下」
丑丸敦史・平山 楽・富田誠之（神戸大学人間発達環境学研究科）

■ シンポジウム 講演要旨 (14:30~17:00) ■

●S01 「日本の草原研究と実践の現状」

湯本貴和 (きょうと生物多様性センター)

森林が気候的な極相植生である日本列島の気候のもとで、高山や河川の氾濫原、海岸に成立する自然草原以外に、火入れや刈取、放牧などの人間の絶えまない干渉によって半自然草原が成立してきた。しかし、農山村での過疎化や産業構造の変化によって、半自然草原は大幅に減少し、現在では国土の1%程度に減った。半自然草原は、草原限定の植物や昆虫の生息地であるばかりではなく、森林からは得られない生態系サービスを提供する場でもある。とくに風力発電所の立地として新たな開発が企画されている草原で、草原の生態系サービスを定量的に解明することは草原固有の生物相を守るためにも必要である。「未来に残したい草原の里 100 選」事業は、半自然草原を維持する活動をおこなっている団体にそれぞれの実績や草原の価値を競わせる場ではなく、同じ悩みや課題を共有する仲間づくりを目指したものである。草原を維持するための新しい産業を興し、古くからある産業に付加価値を与えるためにも、草原のもつ生態系サービスの再評価が火急の課題となっている。

●S02 「遺伝情報からひもとく草原性絶滅危惧昆虫の歴史と保全」

中濱直之 (兵庫県立大学・兵庫県立人と自然の博物館)

近年の半自然草原の面積の減少や環境悪化により、昆虫をはじめ多くの草原性生物が絶滅の危機に瀕している。そうした中、草原性絶滅危惧種は絶滅を回避すべく様々な保全対策が実施されている。ウスイロヒョウモンモドキ及びフサヒゲルリカミキリは、種の保存法において国内希少野生動植物種に指定されるとともに保護増殖事業が実施されており、演者らのグループでもゲノム情報や標本 DNA を活用した保全研究を実施している。本講演では、一連の研究から明らかとなったウスイロヒョウモンモドキとフサヒゲルリカミキリの歴史と保全に向けた知見について紹介する。さらに、草原性絶滅危惧種の保全の際に考えられる課題について、特に保全遺伝学的な観点を中心に議論したい。

●S03 「奈良県曽爾高原の堆積物記録から読み解く火入れの歴史と環境変遷」
井上 淳（大阪公立大学大学院理学研究科）

奈良県曽爾高原には、火入れを伴うススキ原の半自然草原が広く分布している。「曽爾村史」によると、化学肥料がなかった時代には草が肥料として利用されており、各集落が採草地を持っていたことが記されている。このことから、曽爾高原のススキ原も古くから採草地として利用されてきた可能性が高い。しかし、草原の成り立ちや火入れの歴史については、詳しくわかっていなかった。本講演では、曽爾高原の湿原堆積物や累積土壌を用いた花粉分析・植物珪酸体分析・微粒炭分析の結果から明らかとなった、過去約 8000 年間にわたる植生と火入れの歴史を中心に、自然環境の変遷を紹介する。分析結果からは、約 1000 年前にはすでに火入れが行われ、それに伴って草原が発達していたことが判明した。また、その後も火入れは継続的に実施され、現在に至るまで草原の維持に重要な役割を果たしてきたことが明らかとなった。

●S04 「近畿地方における海岸植物群落の多様性と現状」

黒田有寿茂（兵庫県立大学・兵庫県立人と自然の博物館）

潮風や飛砂、表層砂の移動などの影響を頻繁に受ける海岸域では、内陸ではみられない海岸植物が優占種となり、立地環境に応じ多様な植生を形成している。近畿地方でみられる海岸植生のうち草原型のものに着目すると、丹後半島日本海側の砂浜・砂丘植生、紀伊半島沿岸の礫浜植生、瀬戸内海沿岸に点在する塩性湿地植生などが、地理・地形との対応や植生の広がりから特徴的である。また、その植物相は熱帯・温帯域の広域分布種、東アジアを分布の中心とする種、日本固有種などを含み構成されている。海岸域では海岸植物が卓越するが、内陸の半自然草原に生育する種もその一部が海浜の安定帯や海岸沿いの急斜面、風衝地、岩場などでみられる。これらは半自然草原構成種の自然性の生育地を考える上で興味深く、生物多様性保全などの観点からも重要なハビタットといえるだろう。

●S05 「里草地の送粉ネットワークのジェネラリストによる送粉機能の低下」
丑丸敦史・平山 楽・富田誠之（神戸大学人間発達環境学研究科）

棚田における圃場整備や耕作放棄は、畦畔やため池堰堤上の半自然草地（里草地）の環境を大きく変え、草原性動植物の多様性減少を引き起こしている。里草地は、非常に高い生物多様性を草原性植物と植食昆虫の多様性を涵養してきたが、圃場整備や耕作放棄はその多様性減少を引き起こしている。本研究では、圃場整備や耕作放棄による虫媒花植物およびその送粉者の多様性、さらに植物—送粉者相互作用ネットワークや送粉者による送粉サービスをどのように変容させるのかについて、阪神地区における棚田の里草地を調査地として研究を行った。研究の結果、圃場整備や耕作放棄は在来虫媒花植物および送粉者を減少させ、送粉ネットワークのジェネラリスト化を促進することを通じて、在来種への送粉サービスを低下させうることが明らかになった。

■口頭発表 講演要旨（10：30～11：45）■

●001 「森林生態系の物質循環に対する樹幹着生性地衣類の寄与：森林構造の変化に伴う地衣類の存在量およびリターフォールの変化」
杉本 廉（神戸大学大学院農学研究科）

西日本の冷温帯林8林分における地衣類リター収集の結果、全リター量に占める地衣類リター量の割合は0～0.44%であった。地衣類リターには12属が確認された。地衣類リター量を応答変数、各林分を構成する樹種毎の胸高断面積（BA）を説明変数に用いた重回帰分析では、地衣類リター量はカツラ・ミズナラのBAと正の相関があり、樹種毎の立木密度を説明変数に用いた重回帰分析では、カツラ・トチノキの立木密度と正の相関があった。

●002 「トノサマガエルの減少に対する捕食圧の影響の解明」
角 うらん（神戸大学国際人間科学部環境共生学科）

カエル類は多様な体色による防衛をもつ。しかし森林以外に生息するカエル類の体色に関する研究は乏しい。本研究では、ニホンアマガエルの体色変化およびトノサマガエルの背中線が捕食回避に与える影響を検証した。結果、ニホンアマガエルの体色変化とトノサマガエルの背中線は、どちらも捕食回避に有意な影響を与えていなかった。特に、ニホンアマガエルの体色変化は、体温調節などの生理的機能が主な役割であるのかもしれない。

●003 「ゴルフ場池は生物の生育生息場所として機能するか」

廣田瑞希（近畿大学大学院）

日本国内ではため池数が減少し管理の質も低下している。本研究では、ゴルフ場池と周辺のため池で水生動植物を対象に生物調査を実施し、ゴルフ場池がため池生態系の代替として機能する可能性を検討した。両生類のみ池当たりの平均出現種数がゴルフ場池で有意に多かった。ゴルフ場池では絶滅危惧II類4種、準絶滅危惧7種が出現し、アメリカザリガニの出現率が低いことから、ため池生態系の代替となる可能性が示唆された。

●004 「関西地方のカブトムシ販売個体における系統解析に基づいた流通経路の解明と遺伝的攪乱の実態検証」

濱野 友（兵庫県立大学大学院環境人間学研究科）

本研究では、ペットとして人気のあるカブトムシ野生個体250匹と販売個体74匹を対象にMIG-seq解析を実施した。その結果、野生個体と販売個体で異なる集団遺伝構造が確認された。また、西日本と東日本に分けて実施した景観解析では、東日本のみで人工地の割合と遺伝的多様性に正の相関関係が確認された。これらの結果は、飼育個体の逸出などの人為的影響が在来集団の遺伝的攪乱を引き起こすリスクを示唆している。

●005 「環境DNAメタバーコーディングとQGISを活用した水生コウチュウ目の多様性解析」

う せいせい<Wu Qianqian>（神戸大学人間発達環境学研究科）

近年、水田環境の変化が重要な課題となっている。水田は食料生産機能に加え、高い生物多様性を維持する生態系としての役割を果たしており、特に水生甲虫は生物多様性の指標として注目される。本調査では、水田における採水、水質、植生などの環境指標を分析した。その結果、セマルガムシ、コガムシ、ガムシ、シマゲンゴロウ、マメガムシ、コオイムシなどが複数の水田から確認された。特に農薬未処理の水田ではホウネンエビが、生物多様性の高い水田ではカブトエビが確認され、農薬使用が水田生態系に及ぼす影響が示唆された。

■ポスター発表 講演要旨（コアタイム 13：30～14：30）■

●P01 「亀山市における自然共生サイト及び市独自のOECM認定制度の取組について」

○上野篤史（亀山市産業環境部生物多様性・獣害対策室、魚と子どものネットワーク）、谷口倫太郎・峯 和也・新玉拓也（魚と子どものネットワーク）

亀山市は、生物多様性地域戦略に基づいて施策を推進しており、生物多様性国家戦略にもコミットし、市が管理する亀山里山公園にて自然共生サイトの認定を取得した。市独自のOECM認定制度「かめやま生物多様性共生区域認定制度」も創設し、市民や企業等が所有する9区域を認定しつつ活用を模索している。本事例は、水環境の保全に取り組む魚と子どものネットワーク等の市民団体との協働で推進しており、その経緯とともに報告する。

●P02 「環境行政の証拠標本はどこに保存すべきなのか」

佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）

自然史標本は①生物学や地学の学術的証拠標本であり、将来研究活用のための学術資源②人々に自然への興味を喚起する展示や教育に活用する文化資源など、多面的な価値を持つ。（佐久間2025）。応用として、近年はレッドリストなど環境行政の証拠標本としての役割も拡大している。EBPMのための標本は一義的に行政機関が自己の傘下機関で保存する責務を追う。具体事例で検討する。

●P03 「河川による大阪湾への微量重金属供給に及ぼす腐植様物質の影響」

清水大河（近畿大学大学院総合理工学研究科）、杉本優輔・吉田昂平・秦幹太郎・相坂龍祐・中譲太郎（近畿大学理工学部）、中条武司（大阪市立自然史博物館）、益田晴恵（大阪公立大学）、中口 譲（近畿大学理工学部）、大阪市立自然史博物館友の会

腐植様物質とは、土壤に含まれる有機物が二次的に合成されて出来る天然有機高分子成分である。様々な官能基を有することから、自然界中では藻類の栄養素となる微量重金属と錯形成している事が知られている。そこで本研究では、大阪湾に流入する主要な河川である大和川水系や淀川水系の河川水が海水へ与える影響の分析を目的に研究をおこなった。その結果、微量金属とフルボ酸の一部は錯形成し存在していることが示唆された。

●P04 「地上LiDARによる大阪府下スギ・ヒノキ林分の材積検証」

○土井裕介・石井 亘・池口直樹（大阪環農水研）

大阪府内のスギ・ヒノキ林150林分を対象に、地上LiDARを用いて現地調査を実施し、既存の林分収穫表の材積値を検証した。地上LiDARにより算出された材積値は既存の林分収穫表の値より高い傾向を示し、既存の林分収穫表では材積が過小評価される可能性が示唆された。本研究は、高精度な地上LiDARデータに基づき、林分収穫表の改訂や森林資源管理の高度化に貢献すると共に、二酸化炭素吸収量算定の精度向上に寄与することが期待される。

●P05 「ツル草抜きによる上牧・鶴殿ヨシ原の再生」

○綾 史郎（大阪工大名誉教授）、鈴木治夫（雅楽協議会）、木村和男（上牧実行組合）、赤對一雄（京とおうみ自然文化クラブ）、角南 宏（日展書家）

上牧・鶴殿ヨシ原は淀川本川最大のヨシ原として、また箆築用ヨシの産地として著名であるが、淀川の水位低下に伴う環境変化によりヨシ生育面積が減少し、限定的となる中、2021年秋にはカナムグラなどのツル草にヨシが押し倒され、箆築用ヨシの採取が困難となった。雅楽協議会は2022年春より箆築用ヨシの再生を目標としたツル草抜きを始めた。本研究は2023、2024年の茎径調査よりこの事業による箆築用ヨシとヨシ原再生について報告する。

●P06 「広がる雑種タンポポ—日本の環境にどう適応しているのか？」

○城垣 徹（大阪公立大学大学院理学研究科）、久保月也（大阪公立大学理学部）、児玉大志（大阪市立大学理学部）、長船友紀（大阪市立大学大学院理学研究科）、名波 哲・伊東 明（大阪公立大学大学院理学研究科）

外来種セイヨウタンポポと在来種が交雑した雑種が日本各地で増えている。セイヨウタンポポと在来種で生育環境は異なるが、雑種の生育環境はよくわかっていない。雑種は在来種の遺伝子を獲得したことで生育環境が在来種に近づき日本に定着したと予想し、1. 雑種の生育環境は在来種に近づいているか、2. 在来種の遺伝子をより多く持つ戻し交雑雑種が割合を増やしているか、について調べた。その結果について報告する。

●P07 「甲子園浜の養浜後30年間の植生の変遷と攪乱の記録」

○阪口正樹・向山裕子・岸川由紀子・東山直美・岩崎博子（NPO法人海浜の自然環境を守る会）

昭和初期、甲子園浜は地引き網漁や海水浴場で賑った。その後、地盤沈下で砂浜は痩せた。1995年頃、武庫川の砂礫で幅50mに養浜されたが植物は疎らであった。2004年の台風のゴミ跡にハマゴウが現れ、2018年の台風のゴミ跡に山野に生えるセンニンソウが現れた。コウボウシバは今では汀線のほぼ全域に群落を形成している。このように、浜には海からゴミも植物も動物も運びこまれる。甲子園浜での植生の変遷と攪乱を報告する。

●P08 「大和川下流部の植物相の変遷—開発と都市化の進行—」

藤井俊夫（兵庫県立人と自然の博物館）

草原生ヤマラッキョウと、海岸生ヤマラッキョウ（タマムラサキ）の識別点が葉の断面構造や成熟した子房表面の薄膜の発達度合いなど、同定が困難であるため、他の識別法を探索した。現地採集した標本および栽培個体の標本を用いて、識別形質を比較検討した。図鑑に記述されていない点で識別点が見つかった。草原生ヤマラッキョウは、花径が葉叢から出るが、海岸生タマムラサキは花径が葉叢とは別に出ることが明らかとなった。

●P09 「奈良県のツルマンリョウ集団の構造と遺伝的多様性」

丸田吏紗・小倉裕二郎（大阪市立大学理学部）、徳本勇人・吉原静恵・奥野聖也・○伊東 明（大阪公立大学理学研究科）

ツルマンリョウは中国、台湾、日本に分布するサクラソウ科の匍匐性低木で、日本では沖縄、屋久島、山口、広島、奈良のみに小さな集団が隔離分布する珍しい植物である。奈良県の3つのツルマンリョウ集団（吉野町の妹山樹叢、山口神社と宇陀市の御井神社）で2023年～2024年に個体群の構造、繁殖状況、遺伝的多様性を調べた。2年間の調査で分かってきた各集団の現状について報告する。

●P10 「奈良県吉野町の天然記念物妹山樹叢で確認したクモ」
関根幹夫

奈良県吉野町の天然記念物妹山樹叢において、2024年6月1日および10月31日に奈良県版レッドデータブック改訂に関わる調査を行った結果、16科49種のクモ類が確認された。林内は暗く、林床植物に多数のハツリグモが造網していた。リター層は厚いが落葉と土壌中のクモ類は少なかった。

●P11 「カイコ用簡易人工授精装置の改良」

○小長谷達郎・山本花菜（奈良教育大学・教育学部）

人工授精は精子を人為的にメス体内に注入する技術である。人工授精を精子凍結保存と組み合わせれば凍結細胞由来の個体を得られるため、人工授精法の改良は安定的な生息域外保全を講じるうえで重要である。昆虫類では、家畜であるカイコでは精子凍結保存と人工授精の両方が開発されてきたものの、その他の種での適用例は少ない。本研究では、カイコ用の人工授精装置について、効率的でかつより簡易な人工授精装置の開発を試みた。

●P12 「屋久島産キタキチョウにおけるメス化を引き起こすボルバキアwFemの発見」

○松本 陸・新谷明日香・山本花菜・小長谷達郎（奈良教育大・理科）

ボルバキアは、昆虫などに感染する細胞内共生細菌で、宿主の生殖を操作することが知られている。キタキチョウでは種子島と沖縄本島で宿主のメス化を引き起こすボルバキアwFemの感染が確認されてきた。本研究では種子島に隣接する屋久島で調査を実施した。採集個体はすべてメスであった。採卵した2個体のメスの子孫はすべてメスであった。これらの系統の個体はPCR法による検査においてwFem陽性であった。

●P13 「イギリスにおけるチョウ類保全活動の実践とその課題」

山田詞葉（日本チョウ類保全協会）

昨年の夏にイギリスへ渡り、チョウ類保全活動に参加して行った活動について紹介する。絶滅危惧種のチョウの生息地を守るため、適切な植生管理や生息地再生に取り組み、英国チョウ類保全協会の方と協力してモニタリング活動を行った。現地の保全活動の実情を把握し、課題に直面する中で、その重要性を深く実感した。これらの活動を通じて、保全活動の重要性や直面する課題について考察する。

●P14 「能勢町版レッドリストに向けた直翅類の調査とその後」

○鞍井希凧（貝塚市立自然遊学館）、藤原一旭（鳥取大学農学部）、平井規央（大阪公立大学大学院農学研究科）、前田 満（能勢町文化財保護審議会委員長）、角村 茂（御菓子司 津村屋）、天満和久（貝塚市立自然遊学館）

2022年度に策定された能勢町版レッドリストに向けた調査とその後の経過及び補完的な調査に基づき、これまでの調査結果を調査地ごとにまとめた直翅類のリストを作成した。また、生物多様性基礎調査後に、新たに見つかった種についても報告するとともに、レッドリスト掲載種を保全する上で留意すべき環境について、実際に能勢町内のフィールドでそれを再現するための環境整備を実施した結果についても合わせて報告する。

●P15 「都市公園に生息するヒメボタルの保全についての一考察」

直木 湊（大阪府立富田林高等学校・科学部）

富田林市の緑地公園に生息するヒメボタル雄の発光飛翔数を2年間計測した。公園を3区画に分けて、各区画における照度とカウントされた雄成虫の数に負の相関関係が見られた。本種は発光コミュニケーションによって雌雄が出会うといわれており、生息地に人工光が入り込むことは繁殖行動の阻害に繋がる可能性がある。したがって、本種の保全において、人工光の影響は無視できない環境要因であると推察される。

●P16 「大阪府港湾部におけるハヤトゲフシアリとアルゼンチンアリの分布と種間相互作用」

安達 誠（大阪府大・生命）、○上田昇平（大阪公大院・農）

大阪府港湾部のハヤトゲフシアリとアルゼンチンアリが確認された地域においてトラップを用いた分布調査の結果、両種は港湾部の特定の地域に分布し、その分布範囲が部分的に重複していることが確認された。さらに、飼育実験によって種間関係を調査した結果、両種が敵対関係にあることが示された。調査地において、両種の分布は重複しているものの生息場所に違いがみられ、現時点では競争排除が生じていないと考えられる。

●P17 「淀川城北ワンド群におけるトンボ類群集の3年間の変化」

○山内悠司(大阪市立自然史博物館)、鈴木真裕(大阪公立大学大学院)

淀川城北ワンド群のトンボ類群集について、大小2つずつのワンド群で2022～2024年、2023年2月に造成された新規ワンドで2023～2024年の間、各年5～11月に計13回のポイントセンサスを行い、群集構造を比較した。調査の結果、新規ワンドでは経年的な岸辺の植生の増加とともに種数・個体数が増加した。新規ワンド造成により水辺景観が変化した小ワンドでは、他のワンドよりも群集構造が大きく経年変化した。

●P18 「ハッチョウトンボのヤゴを探せ！」

渡辺昌造(皿池湿原守り人)

兵庫県三田市の皿池湿原は、県の天然記念物に指定された希少生物の豊かな生態系を維持している。ボランティアグループ守り人はこの環境を保全する活動を行っている。低茎植物の湿地に生息するハッチョウトンボの生息環境を知るため、成虫の飛翔する時期に人工のトレイを設置し、幼虫の出現を調査した。トレイ設置個所20か所のうち7か所で幼虫を確認し、その設置環境や成長状況について考察を試みた。

●P19 「大阪府におけるタゴガエルとヒメタゴガエルの分布と遺伝的多様性」

堀 拓実(大阪府大・生命)、上田昇平・○平井規央(大阪公大院・農)

大阪府北部では、繁殖期の鳴き声の調査によって、タゴガエルとヒメタゴガエルの両種が分布することが知られている。本研究では、大阪府内の27カ所において両種のサンプリングを行い、遺伝子解析による識別を試みた。その結果、ミトコンドリアDNA・ND1遺伝子の部分配列の比較により両種の判別が可能で、大阪府北東部および南部にはタゴガエルが、北西部にはヒメタゴガエルが分布し、その境界付近では両種が同所的に分布する生息地が存在することを明らかにした。

●P20 「南部丘陵水生生物再生プロジェクト」

○米道綱夫・岸田元男(鉢ヶ峯の自然を守る会)

2023年より専門家夏原由博氏(大阪自然環境保全協会会長)・木村進氏(大阪府立泉北高校教師)・鈴木真浩氏(大阪公立大学研究員)のアドバイスのもとに鉢ヶ峯の小さな水溜りから姿を消したヤマトサンショウウオ(堺市レッドリストカテゴリーA)の絶滅危惧種の再生へ向けて、昨年はキショウブの根っこからの引き抜きや池の整備作業をしてサンショウウオが生育しやすい環境を整備した。今年はこの小さな水溜りに戻ってくるか見守りたい。

●P21 「兵庫県姫路市の形町におけるミシシippアカミミガメの駆除活動と雌雄比率に関する報告」

○木谷亮太（環境保全団体ぴおにあーる、神戸大学大学院人間発達環境学研究科）、名村有史（環境保全団体ぴおにあーる、高知大学大学院総合人間自然科学研究科）、磯部 宙（環境保全団体ぴおにあーる）

ミシシippアカミミガメ (*Trachemys scripta elegans*) は日本で広く生息が確認されている条件付特定外来生物であり駆除活動が急務である。本研究ではカメが日光浴をする習性を利用した日光浴ワナを作成し、兵庫県姫路市の形町の水路で駆除活動を実施した。興味深いことに、捕獲された個体数は雌雄で偏りがなく、メスの比率が高いとする先行研究と矛盾する結果となった。本結果は形的町町の個体群が他地域と異なる雌雄比率で生息していることを示唆する。

●P22 「大和川水系で見つかった国内外来魚オヤニラミ」

松井彰子（大阪市立自然史博物館）

オヤニラミは、国内では京都府以西の本州、四国、九州に自然分布している淡水魚である。近年、自然分布域外の各所への移入が問題となっており、大阪府では猪名川水系の支流に移入・定着していることが知られている。これまで、大和川水系における本種の記録は無かったが、河内長野市の支流において、2023年11月に環境DNA調査で検出され、2024年7月に3個体が採集された。体サイズから、いずれも2023年に生まれたものと考えられる。

●P23 「2024年淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワークの活動報告」

小野友大・小畑 船・小林潤乃介・○鶴田哲也（大阪産業大学）、三橋雅子（大阪工業大学）、田中耕司（(一財)河川情報センター）、山本義彦・丸山勇氣（大阪環農水研）、河合典彦・綾 史郎（淀川水系イタセンパラ研究会）、高田昌彦（琵琶湖を戻す会）

淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク（以下、イタセンネット）では、淀川の城北ワンド群と庭窪ワンド群で外来魚駆除等の保全活動を実施している。本発表では、2024年4～11月にイタセンネットの定例活動として実施した、地曳網による魚類調査の結果を報告する。城北ワンド群では、7月下旬以降、外来魚のブルーギルおよび在来魚のタモロコの個体数が卓越していた。また、オオクチバス・ブルーギルの個体数比率が平均で53.6%と例年と比べて高かった。これは、在来魚のモツゴの個体数が減少したことが主な要因であると考えられる。

●P24 「淀川ワンド群におけるヌートリアによる二枚貝類の食害」

熊田慶太・西村和真・○鶴田哲也（大阪産業大学）、近藤美麻・山本義彦（大阪環農水研）、田中耕司（（一財）河川情報センター）

特定外来生物のヌートリアは基本的に草食性であるが、国内では2000年代以降にイシガイ科貝類を捕食する事例が多く報告されている。近年、淀川のワンド周辺でもヌートリアに捕食されたと思われる貝殻が目立つようになってきたが、その食害の実態は明らかにされていない。そこで本研究では、淀川におけるヌートリアによる二枚貝類の食害状況を把握するために、いくつかのワンドで調査を行った。その結果、ヌートリアは淀川では夏季に周辺を植物で覆われている水辺で、イシガイを多く捕食していることが示唆された。

●P25 「大阪府の臨海埋立地に整備された緑地におけるタヌキの食性とため糞の分布」

喜多紗彩（大阪府大・生命）、平井規央・○上田昇平（大阪公大院・農）

2024年4～12月に堺第7-3区の人工的に整備された緑地周辺でタヌキのため糞の分布を調査した。その結果、調査地内のほぼ全ての道路上でため糞が確認され、7～10月にはその地点数が増加した。糞を用いた食性分析では調査期間を通じて動物質の割合が高かったが、9月には植物質の割合が高くなった。また、各地点に設置した自動撮影カメラの映像を解析した結果、水域に近接する地点では主に夜間に、ため糞場では昼夜を問わずタヌキが撮影された。

●P26 「動体検知技術を用いた自動撮影カメラデータ確認作業の省力化—課題と展望—」

○幸田良介・石塚譲（大阪環農水研・多様性）

自動撮影カメラは、近年の技術進歩にともない、急速に主要な野生動物調査手法となってきた。種を問わずに生息情報を容易に取得できることから、大量のカメラを用いた研究が一般的になりつつある。一方で、撮影データの確認に必要な労力も増大しており、効率よくデータ確認を行える技術開発が求められる。そこでKDDI株式会社の協力のもと、動体検知技術による空打ちデータの除去が可能かどうか検証した結果について報告する。

●P27 「奈良県生駒市におけるツバメの給餌行動の観察と給餌内容の解析」
萩巢 樹（奈良女子大学附属中等教育学校）

奈良県生駒市の飲食店街でツバメ (*Hirundo rustica*) のコロニーを発見し、これをきっかけに2018年から2024年の 7年間、同地域のツバメの子育てを観察した。観察の結果、ツバメの子育てにおける雌雄の役割の違いや、子育ての時期による親鳥の行動の変化が明らかとなった。また、2023年からはヒナの糞のDNA分析を行い、親鳥のヒナへの給餌行動を詳細に解明した。

●P28 「人工巣を利用したフクロウの繁殖期における鳴声の分類と発声頻度の時間変化」

○池上隆之(大阪府大・生命)、村濱史郎(日本バードレスキュー協会)、
梅崎澄人・平井規央・上田昇平(大阪公大院・農)

夜行性猛禽類のフクロウは複数の鳴声を使い分けるとされるが、その詳細な分類や繁殖期における発声活動の動態は調査されていない。本研究では繁殖の成否が異なる2年分の音声データを用いて雌雄成鳥の鳴声を分類し、発声頻度の時間変化を解析した。その結果、鳴声は17種類に分類され、主要な鳴声は雄の求愛声や雌の餌乞い声などに対応することが示された。また、各種鳴声の割合は繁殖の段階や成否によって変化することが明らかになった。

●P29 「工場の屋根にできたケリの集団罫について」

○藤岡エリ子・藤岡純治(東三河野鳥同好会)

ケリは、国内で繁殖する中型のチドリ of 1種で、農耕地で繁殖し、非繁殖期は集団罫を作ることが知られている。罫として、草の刈ってある畔、稲刈り後の田、草丈の低い湿地、休耕田、河口、中州、堤防、建物の屋根などが利用されている。今回は、工場の屋根に作られた罫について、形成される期間、罫を利用する個体数や利用時間帯の変化について発表する。

●P30 「大阪府におけるイソヒヨドリ、ハッカチョウ、ムクドリの繁殖期の分布の変遷」

大阪鳥類研究グループ

大阪府のイソヒヨドリは、2000年代に内陸での記録が増加した。2014年と2024年の繁殖期にイソヒヨドリ、ハッカチョウ、ムクドリの分布調査を実施した。イソヒヨドリは、2014年時点で既に大阪府に広く分布していたが、大和川以北の大阪市内・淀川周辺・山間部には少なかった。一方、2024年には大和川以北にも広く分布するようになっていた。ハッカチョウもまた2014年よりも2024年に分布が拡大していた。一方、ムクドリは、2014年に比べると、2024年は一部で山間部に進出していた。

地域自然史と保全研究大会
関西自然保護機構（KONC）2025年大会
プログラム・講演要旨集

発行 2025年3月2日

発行者 関西自然保護機構

事務局 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23
大阪自然史センター気付

郵便振替口座 00990-2-16679

TEL 06-6697-6262 FAX 06-6697-6306

E-mail konc@omnh.jp

URL: <http://www.omnh.net/konc>

関西自然保護機構 入会のご案内

関西自然保護機構のおもな活動内容は次の通りです。(1) 自然保護・自然環境保全に関する調査・研究の実施、(2) シンポジウム・セミナー・講演会などの開催、(3) 現地見学会の開催、(4) 調査・研究に対する助成事業の実施、(5) 会誌・ニュースの発行、(6) 自然保護および自然環境保全に関する提言と助言

<会費>

●正会員

- 紙媒体及び電子媒体の会誌の配布 5,000円/年
- 電子媒体の会誌の配布のみ 2,500円/年

●維持会員

団体：一口10万円/年、 個人：一口 1万円/年

*正会員会費に寄付金を付加したものと扱わせて頂きます。

<寄付>

少額寄付から随時歓迎します。
